日本における『家礼』式儒墓について

―東アジア文化交渉の視点から（三）

吾妻重二

はじめに

本稿は当紀要第五十三輯（二〇二〇年）および第五十四輯（二〇二一年）に発表した「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交渉の視点から」（一）・（二）に続いて日本における『家礼』式儒墓につき検討を行なうものである。

近世前半期、すなわちおおむね十八世紀前半の享保年間頃までの事例を前稿に引き続きとりあげ、日本において朱熹『家礼』にもとづく墓にはどのようなものがあり、またどのような特色があるのかを考察したい。章の副題が「江戸時代前半その三」から始まるのは、前稿からの継続であることを示す。

諸事項の記載の仕方は前稿と同じで、『家礼』式墓碑の特色をふまえ、最初に円頭型（タイプA）か尖頭型（タイプB）かをまず示し、ついで墓碑正面に刻まれた題字をかぎ括弧つきで掲げる。さらに碑身の寸法（センチ）を高さ×幅×厚さで示す。また趺（台石）については上部（第一段）の高さのみを記した。他に背面などの文字、墳土の有無、『家礼』との関係、その他の特徴についても考察を加えた。

一　日本における『家礼』式儒墓
―江戸時代前半その三

1　中村惕斎、鵜飼石斎

○中村惕斎（一六二九―一七〇二）〈図1右および図2〉

円頭型（タイプA）

「惕齋先生仲君之墓」

碑身　九十五・五×二十八・五×十九

趺　方趺　十九

背面に次の文字を刻む

先生姓仲邨諱之欽字敬甫號惕齋洛陽
人也後遷于東九條元禄十五年壬午七
月廿六日歿享年七十有四

墳土　なし

所在　京都市左京区・円光寺[1]

中村惕斎は京都の朱子学者で同時代の伊藤仁斎と名声を等しくした。著作は多いが特に礼学に精しく、喪礼の書として『慎終疏節』四巻を、祭礼の書として『追遠疏節』一巻を著わし、さらに補足として詳細な『慎終疏節通考』七巻および『追遠疏節通考』五巻を残している。門人の増田立軒が惕斎の教えを記録した『慎終疏節聞録』と『追遠疏節聞録』もある。これらの書はもっぱら『家礼』の喪礼と祭礼を考証、補訂したものであって、日本を代表する『家礼』研究文献として注目される[2]。中国の喪服制度の規定と実例を網羅した研究『親尊服義』六巻もある[3]。さらに音楽研究として『修正律呂新書』二巻と『筆記律呂新書説』三巻を著わしており、儒教の礼楽に関する第一人者としてその研究は他の追随を許さないレベルにあった[4]。

惕斎は元禄十五年（一七〇二）七月死去、ここ円光寺に葬られた（増田立軒『惕斎先生行状』）。碑面にいう「仲君」は中村（仲村）の姓を中国風に一字にしたものである。

現在、墓は円光寺の裏山斜面、徳川家康の歯を埋葬したという東照宮の東隣に鵜飼石斎の墓と並んで設けられているが、もとも

と惕斎の墓はもっと奥の山中にあり、ここに移されたのは平成十三年（二〇〇一）だったらしい[5]。現在、背後に墳土はないが、改葬前に撮られたかつての写真を見ると、墓碑の後ろ、石欄の内側に一定の空間があるので、がんらいはそこに墳土があったようである[6]（図3）。墓碑の大きさは『家礼』にいう周尺に近く、『家礼』本来の形状と大きさをわりあいよく伝えている。これらのことは『家礼』の研究に取り組み、それに忠実たらんとした惕斎らしいつくりを示しているといえよう[7]。

なお寺田貞次『京都名家墳墓録』によれば、ここから南に四キロほど離れた東山区延年寺旧跡墓地に中村家一族の墓域が設けられ、そこに惕斎の妻の墓があった[8]。その形は寺田氏によれば同書にいう「十五種一号」というから、尖頭型だが左右の肩がやや円く、上部だけが尖っている形態だったらしく[9]、『慎終疏節』巻三に『家礼』式の墓碑として載せる「圭首方趺」の図がこれに相当する（図4）。ただし現在、この中村家一族の墓は失われてしまったようである[10]。

○鵜飼石斎（一六一五―一六六四）〈図1左および図5〉

「鵜飼石齋墓」

尖頭型（タイプB）

碑身　百二十二・五×三十六・三×二十五・三

趺　方趺　二十九

墳土　なし

墓碑の向かって左面第一行に「貞節先生藤原鵜飼信之墓誌銘」と刻み、第二行より誌銘を刻んで背面、右面へと続く。文末「寛文四年甲辰仲秋上浣三日／大明虎林既白山人陳元贇謹撰」

墓碑の左手には墓誌を刻んだ誌石二枚が並べて立てられている

左：蓋（凹面）　四十×五十二×九

「延寶五年丁巳十一月／十二日改葬圓光寺

鵜飼石齋府君墓誌

後の世に山くつれ墓やふれ／この石あらはれなはあはれ／みておほひたまへ」

右：底（凸面）　四十一×五十二×九

墓誌本文として履歴を刻む。文末「甲辰仲秋上浣三日

□菴長澤堅節謹誌」

所在　京都市左京区・円光寺[11]

鵜飼石斎は江戸の人で那波活所門人、尼崎藩儒となったが、のち致仕して京都で講説した朱子学者である。墓碑は中村惕斎墓の左側に並んで立っている。碑面の墓誌銘は明人で日本に亡命した陳元贇（一五七八―一六七一）の撰で、銘題にいう「貞節」は石斎の私諡、「信之」は諱である。碑身が百二十二・五センチと惕斎墓よりも高いのは『家礼』にいう「高さ四尺」を日本の曲尺によって計算したためであろう。また、墓誌を刻んだ誌石の蓋（ふた）（凹面）と底（そこ）（凸面）が左手に並べて立てられていて注意される。

墓誌銘および墓誌によれば、石斎は寛文甲辰（四年、一六六四）に没して「洛東新黒谷山塔北百五十歩」に葬られた。これは現在の左京区金戒光明寺・黒谷墓地のことであって、山崎闇斎の墓の北の方にあたる。そしてその後、墓誌の蓋に「延寶五年丁巳十一月／十二日改葬圓光寺」とあるように、延宝五年（一六七七）ここ円光寺に改葬されたのである。[12]

さて、墓碑はいわゆる軒をもつ形式で、正面に陥中はあるがその彫り込みは浅く、山崎闇斎の墓碑に近い。ただし、墓碑に刻んだ履歴を「墓誌銘」と呼ぶのは実は正しくなく、闇斎門人の浅見絅斎は「墓表ニ墓誌銘トカクハアヤマリ也[13]」といい、若林強斎も「表シテ立ルモノヲ墓誌ト云ハ誤ナリ[14]」といっている。いうまでもなく、中国の礼制によれば誌石に刻んで地中に埋められるのが墓誌であり墓誌銘だからである。墓碑に刻む場合は墓碑文、もしくは銘をもつのであれば墓碑銘と呼ぶべきものである。

また図5に見るように、凹状と凸状の誌石は、その大きさから見てもともと一対のものとして作られ、『家礼』の所説に従い、向かい合わせにはめ込まれていたものと思われる。『家礼』喪礼の「刻誌石」条によれば、蓋には「某官某公之墓」もしくは「某君某甫」と刻み、底には簡単な履歴を刻むので、凹状の方が蓋、凸状の方が底である。先に触れた蓋石側の「延寶五年丁巳十一月／十二日改葬圓光寺」の文字は円光寺に改葬された際に追加され

た文字であり、そうであれば、左側にある和文の「後の世に山くつれ……あはれみて」云々の文字も、同じ改葬時に新たに刻まれたのかもしれない[15]。

この「あはわれみて」の語を含む和文の墓誌文は、実は山崎闇斎らが考案したものであって、それについては拙論で明らかにしたので参照されたい[16]。石斎は闇斎と同時代に京都で講学した朱子学者であり、子の錬斎は闇斎門人であったことなどからして、墓碑の形式とともに墓誌文の書式も闇斎学派の影響を受けたものと思われる。

ちなみに、大正十一年（一九二二）刊行の『京都名家墳墓録』には誌石の記録がないので、上述したように、平成十三年（二〇〇一）中村惕斎の墓をここに改葬した際に地下から出土したものであろう。

2　藤井懶斎、米川操軒ら

○藤井懶斎（一六二八―一七〇九）〈図6〉

尖頭型（タイプB）

「伊蒿子滕翁之墓」

碑身　八十×二十四・五×十七・五

趺　方趺　二十一

左面から背面、右面へと次の墓碑文を刻む

滕姓、眞邊氏、臧名、季廉字、自號伊蒿子。

京兆人也。諸世而林□□□之與□魚

伍、其所以隱而處約之故何耶。所謂計

窮力屈、才短不能營畫者是也。讀書而

所庶幾又何耶。所謂不過苟免顯然悔

尤者是也。以是俟命。命將歸盡、因廼穿

一窆於考妣玄廬之側、自爲之銘。是地

也、直雒之乾隅、在鳴瀧山中、呼爲泉谷、

水土最淨。　銘曰　山薈且聳、泉□其

湧、喜吾首丘、永奉先壠

墳土　なし

所在　京都市右京区・西寿寺[17]

藤井懶斎は中村惕斎友人で篤実な朱子学者として活躍した。墓は京都市右京区鳴滝の西寿寺内にある。碑面にいう「伊蒿子」は懶斎の別号である。懶斎は『本朝孝子伝』や『二礼童覧』の著者として知られるが、いま特に重要なのが『二礼童覧』で、この書は『家礼』にもとづきつつ喪祭の二礼を和文でわかりやすく解説した書物であった[18]。

懶斎は父の死去に際し、これを儒葬するとともに三年の喪に服している。右の墓碑文を見ると父の墓もここに隣接してあったらしいが、現在は墓地整理が進められたためか見あたらないようである。写真に見るように墓所周辺はきれいに整頓、改葬され、往時の面影はない[19]。

さて、右に墓碑文の全文を翻刻しておいた。この墓碑文は懶斎自撰で、すでに翻刻が発表されているものの[20]、誤字や脱字があり、句読点も乱れているのでそれらを訂正した次第である。ついでに書き下し文と簡単な語釈もつけておくことにする。

滕は姓、真辺は氏、臧は名、季廉は字にして、自ら伊蒿子と号す。京兆の人なり。諸世而林□□□之与□魚伍、其の隠にして約に処る所以の故は何ぞや。所謂る計窮まり力屈し、才短く営画する能わざる者是れなり。書を読みて庶幾う所は又た何ぞや。所謂る苟くも顕然たる悔尤を免るに過ぎざる者是れなり。是を以て命を俟たん。命将に帰尽せんとし、因りて廼ち一窆を考妣玄廬の側に穿ち、自ら之が銘を為す。是の地や、雒の乾隅に直り、鳴滝山中に在り、呼びて泉谷と為す、水土最も浄なり。銘に曰く、山薈し且つ聳え、泉□其れ湧く、吾が首丘なるを喜び、永く先壠を奉ぜん。

「處約」（約に処る）とは清貧な暮らしを送ること、「計窮力屈、才短不能營畫」（計窮まり力屈し、才短く営画する能わず）は張載『経学理窟』気質篇の語で、『近思録』巻七にも載せられる。みずからの能力の乏しさを嘆く語である。また「不過苟免顕然悔尤」（苟くも顕然たる悔尤を免るに過ぎず）は朱熹の師、李侗の語で『延平答問』に見え、『朱文公文集』巻九十七「延平先生李公行状」にも引用されている。学問はただ大きな後悔や避難を免れる程度にすぎなかったという自嘲の語である。また「一窆」も「玄廬」も墓のことであり、「首丘」は故郷に埋葬されること、「先壠」は先祖の墓所をいう。

ここには晩年、京都の鳴滝に隠棲したこと、父母の墓所の側にみずからの墓を作ったこと、そのようにして生命の尽きるのを待ったことなどが記されているのである。

なお、懶斎墓の向かって左には懶斎次男の**象水**の墓（「象水子滕叔観之墓」）、長男の**革軒**の墓（「革軒真子剛之墓」）が並んでいる。いずれも碑身の高さ四十七・五センチほどの小墓碑だが、尖頭型の『家礼』式となっている。

○米川操軒（一六二七―一六七八）〈図7および図8〉

尖頭型（タイプB）

「操軒幹叔居士」

碑身　九十八×三十・二×二十一・二

趺　方趺　十九

背面に「延寶六年戊午八月十九日」と刻む

墳土　なし

所在　京都市左京区金戒光明寺・黒谷墓地[21]

○妻中村氏（？―一六六五）

尖頭型（タイプB）

「中村氏貞月之墓」

碑身　九十八・五×三十・五×二十一・五

趺　方趺　二十九・五

右面に「米川操軒正室」、背面に「寛文五年乙巳七月十一日」[22]と刻む

墳土　なし

○**米川東庵**（一六一一―一六七六）

尖頭型（タイプB）

「東菴常白居士」

碑身　九十二×三十・二×二十一・三

趺　方趺　三十・五

背面に「延寳四年丙辰七月二十日」と刻む

墳土　なし

米川操軒は京都の朱子学者で前述の中村惕斎、藤井懶斎と親しく、これまた『家礼』によって父を埋葬し神主を奉祀するなど、儒教儀礼を熱心に行なった人物であった。[23]操軒の墓は金戒光明寺にあり、山崎闇斎墓の東北二十メートルほどのところに位置する。ここには写真に見るように、操軒夫妻および兄の東庵夫妻らの墓が六基、右から次のように並んでいる。

「理性大姉米川氏之墓」

「足菴宗節居士」（宗白の子）

「光譽惠三大姉」（常白の妻）

「東菴常白居士」（操軒の兄）

「中村氏貞月之墓」（操軒の妻）

「操軒幹叔居士」

ただし『京都名家墳墓録』によれば、このうち操軒とその妻および理性大姉米川氏の墓三基はここよりも南の別の区画にあった。[24]同書は一九二二年の刊行であるから、その後、同じ米川氏の墓碑を一ケ所にまとめたことになる。また、右に触れた操軒の父（浄光）の儒教式墓ももともとはここに営まれていたらしいが、[25]現在は整理されて見ることはできない。

操軒の墓碑正面に刻まれる「幹叔」は字、「居士」はあとに見る安積澹泊の場合と同じで在家仏教信者の謂ではなく、学徳を備えながら仕官せず家居する人物をいう古い漢語であろう。操軒はどこにも仕えずみずから研鑽に励んだためこの称を用いたと思われる。また、墓碑の大きさは友人中村惕斎のものとほぼ等しいところから、惕斎から教示された可能性がある。

操軒墓の右手後ろにある妻**中村氏**の墓碑も、大きさはほぼ等しい。右端後ろに立つ**理性大姉米川氏**の墓碑は碑身の高さが九十一センチでやや小ぶりだが同じく典型的なタイプBの尖頭型を示している。背面に「寛文十二年壬子七月二十日」と刻まれており、この没年は一六七二年に当たるから時代的に見て操軒の姉かもしれない。

操軒の兄の**東庵**は有名な香人で、別号の常白でよく知られる。[26]墓碑は操軒のよりも高さがやや低いだけで寸法はおおむね同じである。尖頭型だが左右の肩がやや円く、最上部だけを尖らせた形態で、先の中村惕斎の妻の墓型と等しい。右後ろの東庵妻の**光譽**

惠三大姉、および右横に並ぶ東庵の子の**足庵**の墓碑も同型である。いずれも『家礼』にいう「圭首」の形であることは間違いないが、なぜ操軒らの墓と違って最上部だけを尖らせた形になっているのかは今後の検討に俟ちたい。

3　伊藤仁斎・東涯ら

○伊藤仁斎（一六二七―一七〇五）〈図9および図10〉

尖頭型（タイプB）

「古學先生伊藤君碣」（篆題　正面上部に右から二字ずつ刻む）

碑身　百二十二×四十五・五×二十二・五

趺　方趺　二十一・五

正面から左面へと碣銘を刻む　左面の文字は「寶永三年丙戌三月十二當小祥日　北村可昌謹譔／孝子長胤　建」のみ

墳土　あり

所在　京都市右京区・二尊院[27]

仁斎ら伊藤家の墓所は京都右京区嵯峨小倉山の二尊院内にある。これは仁斎の母の寿玄孺人（里村ナベ）が京都の豪商、角倉了以の一族であったため角倉家菩提寺の二尊院に葬られたのが始まりであった。寿玄は延宝元年（一六七三）、夫の了室に先立って亡くなり、仁斎はまず、みずからの母の墓をここに営んだのである[28]。翌年には了室も死去、この地に葬られ、ここが伊藤家の墓所となった。見取り図に見るように、塋域内には仁斎と子の東涯の墓を中心として墓三十数基がずらりと立ち並んでいて印象的である（図11参照[29]）。なお、角倉家の墓所は伊藤家墓所のすぐ裏手（西側）にある。

塋域には仁斎墓を北に、東涯墓を南に、ほぼ同じ造りで配している。この二基のみ石組と石欄でぐるりと周りを取り囲み、また墳土をもつなど規模が大きく、墓碑も大型である。他の墓は現在はおおむね墓碑のみで、大きさはまちまちだが、みな仁斎・東涯のものよりも小型である（図12）。

仁斎墓碑に刻まれる碑文は、「古学先生伊藤君碣銘」として仁斎の『古学先生文集』巻首に載っている。撰者の北村可昌は号は篤所、仁斎門人である。その文末にあるように「寶永三年」（一七〇六）、仁斎死去の翌年、「孝子長胤」すなわち東涯によって造られた。

篆題にわざわざ「碣」というのは中国の礼制と関係がある。碣は地位の比較的低い者の墓碑をいい、いま東涯の『刊謬正俗』を見ると、その第十一「碑碣類」に『唐六典』や『明会典』を引きつつ、五品以上が碑を用い、それ以下では碣を用いると考証している[30]。仁斎は特に位階を持たなかったから謙遜して「碑」といわずに「碣」としたのであろう。また、東涯らが墓制において『家礼』を重要な基準としていたことは、同じ『刊謬正俗』の「碑碣類」に、

吾國之於華、周漢邈矣。其制度文爲、皆斟酌唐禮、故須稽六

典所載。家禮亦儒家之所通用、不可不證。明氏制度、亦可以參考。而今士庶家、製碑甚大、大書深刻、螭首龜趺、殆擬公侯、可謂僭矣、可謂謬矣。慾執禮者、須稽六典家禮所載、以正其制、亦足以免陷親於非禮之失。

（吾が国の華に於ける、周漢邈（はる）かなり。其の制度文為は皆な唐礼を斟酌す。故に須らく六典の載する所を稽（かんが）うべし。家礼も亦た儒家の通用する所なれば、証とせざるべからず。明氏制度も亦た以て参考すべし。而るに今、士庶の家は、碑を製すること甚だ大に、大書深刻、螭首亀趺して、殆（ほとん）ど公侯に擬す。僭なりと謂うべし、謬（あやま）てりと謂うべし。礼を執らんと欲する者は、須らく六典・家礼の載する所を稽えて、以て其の制を正さば、亦た以て親を非礼に陥（おと）すの失を免るに足るべし。）

といっていることから知られる。すなわち周漢は時代が隔たりすぎているため『唐六典』および「儒家の通用」する『家礼』を基準として用い、明代の制度を参照することで「非礼」の過ちを避け、適正な礼制を定めることができるという。

このように、墓碑の形が尖頭型で方趺をもつのは『唐六典』にいう「七品以上立碣、圭首方趺」（同書巻四）および『家礼』の所説によっていることがわかる。また墓碑は高さが百二十二センチ、闊は四十五・五センチ、厚さ二十二・五センチで、日本の曲尺でいうと、それぞれほぼ四尺、一尺五寸、七寸に相当している。これは『家礼』に「高さ四尺」、「闊尺以上」、「其の厚さ三の二に居る」にというのにぴったり合致する長さである。仁斎・東涯らは周尺ではなく、日本の曲尺を使って寸法を計算したことになる。また墓碑の周囲に墓主の履歴を刻む点については『唐六典』には記載がないため、『家礼』に従ったものと見られる。

墓碑の後ろには墳土の跡が残っており、土葬であることを伝えている。墳土は当初はもっと高く盛られていたらしく、東涯撰「先府君古学先生行状」（『古学先生文集』巻首）には「葬于小倉山二尊院先塋之側、墳高四尺、以擬馬鬣云」といっている。すなわち、『礼記』檀弓篇上にいう馬鬣封式――馬の鬣のように上の方を先細りに盛った形――で、高さが四尺すなわち百二十センチほどあったことになる。この高さが四尺というのは『家礼』の「墳は高さ四尺」にならったものである。

仁斎以下、伊藤家の墓制に関しては、仁斎の長孫、東所時代の状況だが、『家訓大略』に伊藤家の喪祭について、

喪祭ハ文公家礼等ヲ取捨シ并古来仕来ノ例モアリ、一ヲ以テ泥ムヘカラス。[31]

というように「文公家礼」を基本にしたと証言されている。浅見絅斎も「仁齋ガ死シテ、儀節ヲ萬事用ルヨシ」と、ふだん朱子学を批判していた仁斎だが葬礼についてはみな『文公家礼儀節』を用いていたと指摘しており、[32]『家礼』の影響の大きさが知られる。

○伊藤東涯（一六七〇―一七三六）〈図13および図14〉

尖頭型（タイプB）
「紹述先生碣銘」（篆題　正面上部に右から刻む）
碑身　百二十二×四十六×二十一・二
趺　方趺　二十二
正面から左面へ、さらに背面へと碣銘を刻む　文末「元文二年歳次丁巳夏六月望日／子善韶建」
墳土　あり
所在　同右

東涯の墓は仁斎の墓の南側にある。墓碑に刻まれる碑文は『紹述先生文集』巻首に「紹述先生伊藤君碣銘」として載っており、それによれば、撰文は内大臣藤原常雅、篆額は權中納言藤原俊将、書丹は右中将藤原隆英である。また、この墓を建てた「善韶」とは東涯三男で伊藤家を継いだ東所である。墳土は今はわずかな盛り上がりしかないが、当初は仁斎の墓と同じく馬鬣封式に高く盛り土されていたのであろう。墓の造作や大きさは仁斎墓とほぼ同じできわめて立派である。

○その他

仁斎・東涯以外の他の主な墓碑についても述べておきたい。先ほど触れた仁斎母の**寿玄**の墓（「壽玄孺人里村氏之墓」）は父**了室**の墓（「伊藤了室府君之墓」）とともに、仁斎・東涯の墓の中間後ろに並んでいる（図15）。これらが当塋域の中で最も古い墓ということになるのだが、ただしこれらの墓碑にはいずれも側面に「孝孫長胤建」と刻まれ、寿玄墓にはその年次が「寶永丁亥」と見えるので、現在の墓碑は宝永二年（一七〇七）つまり仁斎死去の年に、仁斎の墓に先立って東涯により建てられたものとわかる。

碑面に刻まれる「寿玄」は私諡、「孺人」は中国風の夫人の尊称で、羅山妻の「順淑孺人」の場合に等しい。「府君」はこれまた中国風の亡父の呼称である。ともに墓碑の碑身の高さ九十七センチほどで、仁斎・東涯のよりやや小さい。

このほか、仁斎三男**介亭**の墓（「謙節先生伊藤君碣」）、東涯以後、伊藤家を継いだ**東所**の墓（「修成先生碣銘」）、**東里**の墓（「恭敬先生碣」）、**東峯**の墓（「靖共先生碣」）などは、『家訓大略』に「東所先生ニ到テ、塋域稍窄[33]」というようにいくらか小ぶりになるが、みな尖頭型で篆題をもち、風格あるものとなっている。

この伊藤家墓所は『家礼』をふまえた儒式墓としてもっと注目されてよい。見取り図に示したように、当塋域には多くの墓碑が立ち並んでおり、現在なお伊藤家代々の墓として維持されているのだが、驚くべきことに、大きさに違いはあるものの、平成八年（一九九六）に作られた左端の「分家　伊藤家之墓」を除いてすべて尖頭型形式となっている。昭和四十七年（一九七二）に立てられ、今なお伊藤家の人々を埋葬する「伊藤氏世代之墓」（仁斎墓右手前）も『家礼』式尖頭型である。これら伊藤家の墓碑文の多くが側面や背面に墓主の履歴を刻んでいるのも、もとをただせ

ば『家礼』によるものである。[34] 伊藤家の方々はこの墓形はただ家法に従っているだけで、『家礼』にもとづくものとは意識しておられないであろうが、単なる史跡としてのみならず、現代における『家礼』式墓碑としても、長尾雨山らの墓とともに注意されるべきものである。[35]

○**北村篤所**（一六四七―一七一八）〈図16〉

円頭型（タイプA）

「文英先生碣銘」（篆題　正面上部に右から刻む）

碑身　百二十・三×四十七・七×二十六・八

趺　方趺　二十五

正面に碣銘を刻み、背面に伊藤東涯の次の文を刻む

文英先生、名重於搢紳之間、招致就問、多所矜式、前中納言従二位韶光卿爲撰其碣銘、參議左大辨光榮卿書幷篆額、其子弟屬予記其由于碑陰云　　伊藤長胤謹誌

享保五年庚子七月十一日　　男　可憲　建

墳土　なし

所在　京都市左京区金戒光明寺・黒谷墓地[36]

北村篤所は京都の生まれで伊藤仁斎に学び、大和・戒重藩の儒臣として講学するとともに、藩主の侍講になった人物である。先ほどとり上げた仁斎の「古学先生伊藤君碣銘」の撰者でもあるため、ここにあわせて紹介する。

篤所の墓は金戒光明寺・黒谷墓地の、山崎闇斎墓の東十五メートル、米川操軒墓の北十メートルほどのところにある。墓碑の大きさは仁斎・東涯のとほぼ同じで、篆題に「碣銘」というのも共通している。これが仁斎たちの方式なのであろう。この墓碑を『家礼』式と見るのも、こうした仁斎・東涯との関係による。ただし、上部が円い円頭型（タイプA）である点だけは違っている。

碣銘撰者の「前中納言従二位韶光卿」は勘解由小路韶光で仁斎の『古学先生文集』の序も書いており、書丹・篆額者の「參議左大辨光榮卿」は歌人の烏丸光栄である。[37] 背面に刻まれる東涯の碑陰文は、東涯の『紹述先生文集』巻十四・碑陰類に「書文英先生碑陰」として収められている。[38]

なお、碑銘に「葬于黒谷先塋之側」というから、ここには北村家先祖の塋域があったはずだが、今その面影はなく、篤所の墓碑だけがぽつんと立っている。

二　日本における『家礼』式儒墓
――江戸時代前半その四　水戸藩士

茨城県水戸市には水戸藩第二代藩主徳川光圀が作らせた大規模な儒式墓地があり、今もなお受け継がれていて注目される。常盤共有墓地と酒門（坂戸）共有墓地がそれで、もともと寛文六年（一六六六）四月に光圀の命によって開かれた。

儒教に傾倒し林羅山・鵞峰ら林家とも関係の深かった光圀は、寛文元年（一六六一）、父頼房を儒礼によって埋葬し、水戸北方の常陸太田瑞龍山に儒式の水戸徳川家墓所を造営したあと、寛文六年（一六六六）四月、今度は家臣のための儒式墓地を水戸城下郊外に作る。城下の台地部すなわち上町に居住する藩士のためには常盤墓地を、低地部の下町に居住する藩士のためには酒門墓地を造るのである。その際にはさらに、葬祭実践のための手引書として「文公家礼」にもとづく『喪祭儀略』を和文で撰述し藩士に配布した。そのことは「桃源遺事」巻一上に寛文六年のこととして、

同六年丙午四月、諸士の墓所を常州水戸常盤と坂戸の両所に被仰付、且文公家禮により、喪祭儀略といふ書を御えらひ、諸士に下され候。此時御歳三十九。[39]

と述べられるとおりで、これらの実践には前年の寛文五年（一六六五）、賓師として迎えた朱舜水の影響があったようである。このあたりの経緯は旧稿で論じたので参照していただければ幸いである。[40]

そして「酒門・常葉（常盤）の両墓地は、江戸時代を通して今日に至るまで、特定の寺に属さず、諸宗の共同墓地として利用され、昔時の光圀の理想を物語っている」[41]といわれるように、現代における貴重な儒式墓地としてその姿をとどめている。同じ儒式でも瑞龍山の水戸徳川家墓地では大名としての地位にふさわしい格式が整えられたのに対し、常盤・酒門墓地においては士庶のための儀礼書として『家礼』の影響が顕著であり、日本における最も大規模な『家礼』式墓地として異彩を放っている。ここではそのうちのいくつかの代表的な事例を紹介する。時期的には幕末にかかるものもあるが、これらの墓地の当初の造営が江戸時代前半なのでここでとり上げることとする。[42]

1　常盤共有墓地[43]

○安積澹泊（一六五六―一七三八）〈図17〉

尖頭型（タイプB、四角錐型）

「故老牛居士安積君墓」

碑身　九十×二十九・八×二十・五

趺　方趺　二十一

向かって左面から背面、右面へと墓碑文を刻む　文末「元文戊午之冬／孝子　直行建／友人小池友賢撰」

墳土　なし

所在　水戸市松本町・常盤共有墓地

安積澹泊は前期水戸藩を代表する儒者で、光圀の命により少年時代から朱舜水に師事、のち彰考館総裁として『大日本史』編纂に主導的役割を果たした。テレビドラマ「水戸黄門」渥美格之進のモデルということで、現在、墓に向かう墓道には「水戸黄門格さんの墓」の標識があり、墓横には「格さんの墓」の幟が立っ

ている。

その墓は高さ六十センチほどの石組が重ねられ、その上に墓碑が立つ。碑面にいう「老牛居士」は致仕後の自称であり、「居士」は在家の仏教信者と誤解されがちだが、この語はもともと学徳を備えながら仕官せず家居する人物という意味の漢語で[44]、澹泊はそのような意味を込めて致仕後の自分をこの語で呼んだのであろう。墓碑文の末尾にいう「直行」は澹泊の嗣子、撰者の小池友賢は号は桃洞、水戸藩儒で、これまた彰考館総裁になった人物である。この墓碑文は『事実文編』巻二十九[45]、『史林墓表[46]』にも翻刻が載っている。

上述したように、水戸藩では光圀らが『家礼』にもとづいて撰述した『喪祭儀略』が藩士の喪祭の手引書として長く遵守され、安積澹泊の墓もこれによって作られたと見られる。『喪祭儀略』は写本で伝わり、いくつか異本があるが、いわゆるB系統『喪祭儀略』には本文とともに澹泊の葬儀のもようを記した「安積氏葬儀」が附されているので、ひとまずこれによって石碑図を挙げておく（図18）。澹泊の墓碑はこの図に忠実に作られていることが一見してわかる。

また、ここには墓碑（石碑）の寸法が次のように記されている。

高四尺　今尺ニテ二尺五寸四分

厚七寸九分　今尺ニテ五寸一分

闊サ一尺一寸八分　今尺ニテ七寸六分

この寸法は林鵞峰『泣血余滴』にいう荒川亀（羅山妻）の墓碑とほぼ同じで、「尺」は周尺、「今尺」は日本の曲尺をいう[47]。ただし、澹泊墓碑の実際の寸法はこれより大きく、碑身の高さだけを見ても「今尺ニテ二尺五寸四分」というのは二・五四×三十・三センチで七十七センチになるはずだが、実際の碑身は九十センチある。水戸藩士の他の早期の墓碑は、このあとの望月恒隆や河合菊泉、打越弥八らの事例に見るように、碑身の高さはおおむね七十七～七十八センチなので『泣血余滴』と『喪祭儀略』によっていることは間違いなく、したがってまた羅山や荒川亀ら林家の墓碑とほぼ同じ大きさになっているのであるが、澹泊の墓碑がそれより一回り大きいのはおそらくその功績の大きさを考慮したためであろう。このことはすぐあとに見る青山拙斎と佩弦斎の墓碑が比較的大きく、澹泊と同程度の規模を持っていることも考えあわせられる。拙斎と佩弦斎が幕末の水戸藩を代表する高名な学者であったことはいうまでもない。

もう一つ注意されるのは墓碑の形であり、タイプBの尖頭型ではあるが、いわゆる将棋型ではなく、四辺から頂点に向かってすぼまる四角錐型をとっている点である。このことは石碑図の説明に「碑首ハ圭首トテ四方ヨリソギテ中ヲ高クスルナリ」と見えるとおりである。『家礼』にいう「圭首」を上部の尖った形状、しかも四角錐型と解したわけで、水戸藩士の『家礼』式墓碑は、常

盤・酒門においてもみなこの形式になっているのが他と異なる特色になっている（図19）。

墳土は現在残っていないが、『喪祭儀略』には「墳墓図」として『泣血余滴』と同じ馬鬣封の図が載っていることからすると、当初は羅山や仁斎らの墓と同じく馬鬣封の墳土をもっていたと推測される。また同書には「誌石図」（図20）も載っており、そこに、

右、石二尺四方二枚ホドニシテ二枚ニ字ヲ刻ス。両面ヲ合セテ鉄縄ニテ十文字ニ之レヲシメルナリ。土ヲ一二尺入テ後誌石ハ前方ニ埋ムベシ

とあることからすると、『家礼』式の墓誌銘を刻んだ誌石も埋められている可能性がある。

○高橋坦室（一七七一―一八二三）〈図21〉

尖頭型（タイプB、四角錐型）

「又一郎高橋君墓」

碑身　六十五

趺　方趺

所在　同右

澹泊墓の北側奥、高橋家の墓所内にある。坦室は長久保赤水に学び、藤田幽谷とともに両才子と称された儒者。天明六年（一七八六）彰考館に入り、文化四年（一八〇七）彰考館総裁となった。写真の左奥から右へ二つ目が坦室の墓で、碑身は高さ六十五センチと、澹泊の墓碑よりもかなり小ぶりで、墓碑正面にも「又一郎高橋君墓」とのみ刻む、きわめて質素なつくりである。坦室は名は広備、又一郎は通称である。なお、右手の新しい標柱に記される「担室」は「坦室」の誤記である。

この墓所内には高橋家の人々の尖頭型墓碑がほぼ同じ大きさでずらりと並んでおり印象的である。

○青山拙斎（一七七六―一八四三）〈図22〉

尖頭型（タイプB、四角錐型）

「故小姓弘道館総教拙齋青山先生墓」

碑身　八十九×三十一・二×二十一・七

趺　方趺　十六

左面から背面、右面へと墓碑文をびっしりと刻む

墳土　なし

○青山佩弦斎（一八〇八――一八七一）

尖頭型（タイプB、四角錐型）

「故大學中博士青山君墓」

碑身　八十七×三十・五×二十一・五

趺　方趺　十六

墳土　なし

所在　同右

青山家の墓所内に並んで立つ。拙斎は延于（のぶゆき）の名でも知られる。水戸藩士で立原翠軒に師事、寛政六年（一七九四）に彰考館に入

り、文政六年（一八二三）総裁となる。藤田幽谷らとともに徳川斉昭の藩政改革に尽力した人物として知られ、著述も多い。天保九年（一八三八）斉昭が藩校弘道館を作ると側近である小姓頭に抜擢され、会沢正志斎とともに弘道館初代総教となった。碑面にはその職位が刻まれている。墓碑の寸法は安積澹泊のものにほぼ等しい。

碑身の周囲に刻まれる長文の墓碑文は子の青山佩弦斎の撰で、現在はかなり磨滅しているが、『事実文編』巻五十九[48]および『史林墓表』[49]に「先考拙齋先生墓表」として翻刻が掲載されていて読むことができる。このほか会沢正志斎に「量介青山君墓誌」があるので、誌石が埋められたものと思われる。[50]量介は拙斎の通称である。

また向かって右には妻の**佐埜氏**の墓碑（「故佐埜氏夫人之墓」）が、やや小ぶりだが同じ四角錐型で並んでいる。

向かって左には青山佩弦斎の墓が並ぶ。佩弦斎は拙斎の長子で、一般に延光（のぶみつ）の名で知られる。天保元年（一八三〇）彰考館総裁代役、同十四年（一八四三）小姓頭に進み、弘道館教授頭取となった。『大日本史』の完成に貢献し、水戸藩の学問をよく継承した学者として著名である。碑面にいう「大学中博士」とは明治二年（一八六九）、新政府によって設立された大学校における教官の肩書で、この時、大博士は平田鉄胤（国学者）と水本成美（律令学者）の二名、それに次ぐ地位の中博士は青山のほか国学者の谷森善臣と権田直助の三名だけだったから、青山は日本における漢学教官のトップに抜擢されたことになる。[51]墓碑にはそのような誇り高い職位を刻んでいるわけである。

墓碑の大きさは父拙斎のものとほぼ等しいが、墓碑文は刻まれない。また向かって左には妻の**服部氏**の墓碑（「先妣服部氏之墓」）が、やや小ぶりだが、これまた同じ四角錐型で立っている。

2　酒門共有墓地[52]

○望月恒隆（一五九六―一六七三）〈図23〉

尖頭型（タイプB、四角錐型）

「望月氏五郎左右衛門之墓」

碑身　七十八×二十三×十五・五

趺　方趺　十九

向かって右面にのみ「寛文三年癸丑四月三日」と刻む

墳土　なし

所在　水戸市酒門町・酒門共有墓地

酒門共有墓地も常盤共有墓地と同様、『家礼』式の尖頭型墓碑がずらりと並んでいて壮観である。

望月恒隆の墓は望月家の墓所内にある。恒隆は儒者ではなく、徳川頼房・光圀に仕えた水戸藩早期の奉行で、寛永の総検地、久慈川の水路開削、笠原水道敷設などを指導した功労者であった。[53]正面に「望月氏五郎左右衛門之墓」と刻む墓碑のつくりは安積澹

泊の項でも触れた『喪祭儀略』に忠実である。恒隆は常盤・酒門両墓地が開かれた寛文六年（一六六六）の数年後に死去しており、同墓周辺は新たに整地、修復が加えられているものの、同書にもとづく墓碑としてはかなり早期のものに属していて貴重である。

碑身は澹泊の墓碑より小さく、林羅山やその妻荒川亀と同じなので、上述したように『泣血余滴』と『喪祭儀略』の寸法に従ったようである。

なお、墓所内の右手には、子孫によって石造の大きな「系図碑」が立てられており、恒隆の祖父以下、現在に至る望月家の家系を刻んでいる。

○河合菊泉（一六九九―一七五五）〈図24〉

尖頭型（タイプB、四角錐型）

「故菊泉河合君墓」

碑身　七十八×二十三・五×十五・三

趺　方趺　十四

墳土　なし

所在　同右

河合菊泉は代々水戸藩家臣で、安積澹泊に師事、享保元年（一七一六）彰考館に入り、元文五年（一七四〇）彰考館総裁となった。墓は河合家墓所の一角にあり、墓碑の形と大きは望月恒隆のものに等しい。墓碑の表面は磨滅がはなはだしいが、墓碑文は刻まれていないようである。

墓所は整地、改修して墓碑のみを一ケ所に集めてあり、河合家の人々の墓碑がずらりと並んでいて印象的である。ここには尖頭型のタイプBのほか、円頭型のタイプAも多い。このタイプAは水戸藩では墓主が女性の場合によく見られ、次に見る打越弥八の妻の場合もそうなっている。ただし他の例を見ると、男性＝タイプB、女性＝タイプAとは一概には言い切れず、これらの形を水戸藩でどのように区別していたのかは今後の検討に待ちたい。

○打越弥八（一七一六―一七七五）〈図25〉

尖頭型（タイプB、四角錐型）

「故弥八打越君墓」

碑身　七十七×二十四×十五・五

趺　方趺　十六

左面から背面、右面へと墓碑銘を刻む　文末「男　直温　立／史館編修立原萬撰并書」

墳土　なし

所在　同右

打越弥八は彰考館総裁となった打越樸斎（一六八六―一七四〇）の長子で、墓碑銘によれば名は直道、通称は弥八、学者ではなく留守居同心頭となった家臣である。墓碑銘を書いた立原萬は立原翠軒で、それによれば弥八とは面識がなかったが、すぐれた人物であるとの評判を聞きこれを撰したという。この墓碑銘は現

在、立原の『此君堂文集』巻二に「故彌八打越君墓碑銘」として収録されている。[54] 墓碑は形、大きさとも望月恒隆のものに等しい。

向かって左側にはその妻**太田氏**の墓があり、タイプAの円頭型になっている。碑面に「故弥八打越君／故太田氏婦人　墓」と刻んでいるので一見、合葬墓のように思われるが、そうではあるまい。

なお現在、写真に見るように墓前には「贈従五位　彰考館総裁撲斎打越弥八直正」の標柱が立てられいるが、正しくない。贈従五位とは大正七年（一九一八）、樸斎が政府から贈位されたものだが、それはともかく、かたわらにある墓は碑身に刻まれる墓碑銘からして弥八（直道）の墓であることは明らかであって、樸斎（直正）の墓ではない。おそらくこれは父の樸斎が同じく「弥八」と通称されていたことから、これを樸斎の墓と勘違いしてしまったのであろう。[55] この標柱は「樸斎」を「撲斎」と誤記しているという問題もある。

そもそも「故彌八打越君墓碑銘」によれば、弥八は「先人墓側」に葬られたといい、また樸斎には別に名越南谿撰「樸斎打越君墓碑銘」[56] が伝わっているので、この地にはかつて弥八の父樸斎の墓もあったはずだなのだが、今は墓地整理により失われてしまったらしく、はなはだ残念である。

○藤田北郭（一七七四―一八四六）〈図26〉

円頭型（タイプA）

「故執政晴軒藤田府君之墓」

碑身　百七×三十四・五

左面から佐藤一斎の墓碑文を銘を刻む

文末「弘化四年歳次丁未春三月上浣　江都昌平學講官佐藤坦撰幷題面　男梶書丹／藤田貞松建」

墳土　なし

所在　同右

藤田北郭はこれまた水戸藩家臣で、小姓頭、大番頭を経て大寄合頭を歴任し、天保五年（一八三四）執政に任ぜられるが、藩政改革を批判して天保十年（一八三九）隠居する。立原翠軒に学び、書道・篆刻にすぐれた。碑面にいう「晴軒」はその別号である。[57]

藤田家墓地は河合菊泉ら河合家の墓所に隣接しており、北郭の墓碑はタイプAの円頭型で他よりも大きく、藤田家墓地の最奥にどっしりと鎮座している。碑身に刻まれた佐藤一斎の長文の墓碑文は藤田の儒者としての面目をよく伝えている。[58] 佐藤一斎（名は坦、一七七二―一八五九）は、江戸時代文化・文政から天保年間にわたって幕府の教学を担った儒者で、『家礼』をふまえつつ儒教葬祭を再編した『哀敬編』を著わしていることが想起される。[59] また書丹者の「梶」は一斎継嗣の佐藤立軒（一八二二―一八八五）で、立軒は青山拙斎門人である。

ただ、とりわけ興味深いのはその手前に尖頭型（タイプB、四角錐型）の小型の墓碑が数多く並んでいることであり、墓地を整地したためであろう、藤田家の人の墓碑がぎっしりと林立し、見る者にたいへん強い印象を与える。

以上、水戸藩の事例のうち、ごく代表的なものをいくらか取り上げて検討した。もちろんここに造られた墓には、常盤共有墓地の藤田幽谷や藤田東湖の墓、酒門共有墓地の小宮山楓軒の墓など、かなり大きな墓表を持つものもあり、それらは必ずしも『家礼』に則ってはいない。しかしそのような大型の墓は江戸時代のものとしてはわずかであり、その地位や功績、影響が顕著であることから大型化したと見るべきであって、これらの共有墓地の墓制の基本が『家礼』にあることは明らかである。つまりこれらの共有墓地は日本有数の『家礼』式墓地であるということができるのである。

三　日本における『家礼』式儒墓
――江戸時代前半その五　高松藩主

ここで四国高松藩主の墓二基について述べたい。なぜここにとり上げるかというと、水戸藩および『家礼』式儒墓と顕著な関係が見出せるからである。これら高松藩主の墓と『家礼』とのかかわりについては従来指摘されたことがないと思われるので、この機会に論じておくことにする。(60)

○松平頼常（一六五二―一七〇四）〈図27〉
尖頭型（タイプB）
「故四位少將南嶺源節公之墓」
碑身　百二十二×三十六・四×二十四・五
趺　方趺　二十九・四
左面から背面、右面へと長文の墓碑銘を刻む　文末「寶永元年歳次甲申五月十三日　讃陽文学臣菊池武雅謹勒」
墳土　あり
所在　さぬき市造田乙井字北山田・霊芝寺（日内山）

○松平頼恕（一七九八―一八四二）〈図28〉
尖頭型（タイプB）
「故正四位下中將南溟源愨公之墓」
碑身　百二十三・三×三十六・四×二十四・五
趺　方趺　三十八・八
側面から背面へ長文の墓碑銘を刻む　文末「本藩儒員臣高尾養謹撰」
墳土　あり
所在　同右

高松藩主松平家歴代の墓所は高松市仏生山町の法然寺内にあるが、第二代頼常（一六五二―一七〇四）と第九代頼恕（一七九八―一八四二）の墓のみ、そこから十四キロほど東に離れた、さぬき市霊芝寺（日内山）の墓所内に営まれた。彼らの墓はまだ現地

調査していないが、報告書を見ると明らかに『家礼』式の尖頭型（タイプB）を呈している。これは他の歴代藩主の墓が法然寺内に、卵型の無縫塔型（仏式）で営まれているとのとは違う形式である。

頼常は徳川光圀の子で、光圀は兄頼重の子綱條に水戸藩を継がせ、わが子の頼常を高松藩主松平頼重の養子とし高松藩主を継がせた。また頼恕は水戸藩主徳川治紀の子で、これまた高松藩主松平頼儀の養子となり、高松藩主を継いだ。このように、二人とも水戸藩出身であるところから同藩の方式に従い儒葬されたのである。彼らの墓はほぼ同じつくりで山中に東西に並んでいる。頼常および頼恕の墓碑正面に刻まれる「南嶺」「南溟」は号、「節公」「慤公」は諡号である。

墳土は現在わずかな盛り土しかないが、もとは馬鬣封形式で高く盛られていたことが調査により明らかになっており、光圀らの墓と共通している。碑身の大きさも光圀の場合は百二十四センチ×四十三センチ×二十七センチであるから[61]、おおむね等しい。特に高さは『家礼』にいう「四尺」を日本の曲尺で計ったものと考えられ、伊藤仁斎・東涯、鵜飼石斎の墓碑ともほぼ同じになっている。

ただし、光圀らの場合と違いもある。光圀らの墓が螭首亀趺の形式をとり、大名としての風格を明示しているのに対し、水戸家の支藩という格式の差を考慮したのであろう、頼常・頼恕の墓にはそれがない[62]。また光圀らの墓碑が円頭型であることも違っている。ただいずれにしても、この墓制が『家礼』にもとづく形式であることはこれまでの考察からして明白であろう。墓碑銘撰者の菊池武雅（一六五九―一七二〇）は高松藩儒で号は半隠、かつて林鵞峰・鳳岡に学び林家学塾の学頭にまでなった儒者であるから、鵞峰の『泣血余滴』を参照したこともまず間違いないと思われる。

（続く）

注

（1）筆者が調査、撮影したのは二〇一九年十一月十七日である。

（2）『慎終疏節』と『追遠疏節』は吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇』一（関西大学出版部、二〇一〇年）に、『慎終疏節通考』、『追遠疏節通考』、『慎終疏節聞録』、『追遠疏節聞録』は同編著『家礼文献集成　日本篇』四（関西大学出版部、二〇一五年）にそれぞれ影印した。

（3）『親尊服義』は吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇』八（関西大学出版部、二〇一九年）に影印した。

（4）榧木亨『日本近世期における楽律研究――『律呂新書』を中心として』（東方書店、二〇一九年）参照。

（5）大島晃「先学の風景――人と墓「鵜飼石斎」」（大島『日本漢学研究試論――林羅山の儒学』（汲古書院、二〇一七年）。

（6）上野益三『日本博物学史』（平凡社、一九七三年）図版3による。

（7）惕斎墓とあとに述べる鵜飼石斎墓の実測図は松原典明『近世大名葬制の考古学的研究』（雄山閣、二〇一二年）二六四頁以下に載

っている。

（8）寺田貞次『京都名家墳墓録』（村田書店、一九二二年）二六六頁「中村惕斎室墓」。

（9）本稿（二）注（62）参照。

（10）筆者は令和二年（二〇二〇）二月二十四日、延年寺旧跡墓地を再訪したが、『京都名家墳墓録』のいう場所に惕斎妻の墓を見つけることができなかった。墓地管理所を兼ねる松田花店の御母堂によると、中村家の遺族は今も京都に住み墓参を続けているが、先年改葬し墓を新しくしたという。そこで教えられたあたりに行くと確かに「昭和三十四年八月再建」と刻まれた「中村家之墓」の墓石があった。しかしよく見ると、その側には中村益斎の小さな墓碑が寄り添うように並んでいる。中村益斎は京都の儒者で、没年は文政十二年（一八二九）で惕斎よりはるかに遅れ、しかも惕斎の一族ではないらしい。『京都名家墳墓録』も惕斎妻の墓域と益斎の墓域を別の場所として記録している。つまりこの「中村家之墓」は惕斎一族の墓ではないのであって、惕斎妻および惕斎一族の墓は現在、失われてしまったようである。

（11）筆者が調査、撮影したのは中村惕斎墓と同じく二〇一九年十一月十七日である。

（12）陳元贇撰の墓誌銘および誌石墓誌の翻刻は、注（5）大島晃「先学の風景――人と墓「鵜飼石斎」」に掲載されている。

（13）吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇』九（関西大学出版部、二〇二一年）、一三一頁。

（14）注（1）吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇』一、二〇四頁上段。

（15）この墓誌については石田肇「江戸時代の墓誌」（『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編、第五十六巻、二〇〇七）が報告している。

（16）吾妻重二「『家礼』と崎門派における神主・櫝・墓碑・墓誌」（『関西大学中国文学会紀要』第四十三号、二〇二二年）。

（17）筆者が調査、撮影したのは二〇二二年二月十四日である。

（18）『二礼童覧』は吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇』五（関西大学出版部、二〇一六年）に影印と翻刻を載せた。懶斎の葬祭実践については、吾妻重二「藤井懶斎『二礼童覧』について――「孝」と儒教葬祭儀礼」（『関西大学中国文学会紀要』第三十七号、二〇一六年）参照。

（19）柴田篤・辺土名朝邦『中村惕斎・室鳩巣』（明徳出版社、一九八三年）四二頁に懶斎墓の写真があるが、周囲の様子など現在とはかなり違う。

（20）『京都名家墳墓録』六六三頁、勝又基「藤井懶斎年譜稿」（一）（『明星大学研究紀要』日本文化学部・言語文化学科、第十六号、二〇〇七年）。勝又論文によれば、西寿寺は懶斎の兄弟の再興にかかり、懶斎らの墓がここに営まれたのもその縁による。

（21）筆者が調査、撮影したのは二〇二二年二月十四日である。

（22）この背面の刻字は『京都名家墳墓録』四六七頁による。

（23）注（18）吾妻重二「藤井懶斎『二礼童覧』について――「孝」と儒教葬祭儀礼」参照。

（24）『京都名家墳墓録』では「米川東菴墓」が四五七頁に、「米川操軒墓」が四六六頁に載っていて位置が違う。筆者は以前、同書のいう場所に操軒の墓を訪ねたが、いくら探しても見つからなかった。最近になって初めて東庵墓所に移されていることを知った次第である。

（25）翠川文子「香人・米川常白伝考」（『川村学園女子大学研究紀要』第十三巻第二号）一七五頁による。なおこの論考はこの米川家墓所についても調査しており、教えられるところが多かった。

（26）前注の翠川文子「香人・米川常白伝考」参照。

（27）筆者が調査、撮影したのは二〇一六年九月二十一日および二〇二二年一月二十四日である。

(28) 加藤仁平『伊藤仁斎の学問と教育　古義堂即ち堀川塾の教育史的研究』（目黒書店、一九四〇年）附録の「伊藤家系譜」に寿玄のことを述べて「伊藤氏葬二尊院以孺人爲始、壽玄孺人母家角倉之族吉田氏歸依二尊院、因葬孺人」という。

(29) （　）内に墓主が誰かを簡潔に記した。これについては各墓碑に刻まれた墓碑文および前注所掲「伊藤家系譜」を参照した。

(30) 『続日本儒林叢書』第三冊（東洋図書刊行会、一九三一年）所収。

(31) 注（28）「伊藤家系譜」八八二頁。

(32) 浅見絅斎「常話雑記」（近藤啓吾・金本正孝編『浅見絅斎集』、国書刊行会、一九八九年）五五四頁。葬礼に関する絅斎の仁斎批判は辛辣であって、さらに「何様ニクキヤツヂヤハ。程朱ノ格物ノ説ヲソシリテ、又神主ナドハ其制ヲ用ル。神主式ハ程子ノ格物ノ内カラ出タモノト云コトヲシラヌゾ」といっている。

(33) 注（28）「伊藤家系譜」八八二頁。

(34) 亀山聿三編『近代先哲碑文集』第十三集「古義堂伊藤氏碑文集」（夢硯堂、一九六八年）に当伊藤家墓地の墓碑文のうち「古学先生伊藤君碣」「恵慈孺人墓銘」「紹述先生碣銘」「温正孺人墓銘」「謙節先生伊藤君碣」「修成先生碣銘」「靜懿井口氏之墓」「恭敬先生碣」「靖共先生碣」を載せている。

(35) 長尾雨山および長尾家の墓については、吾妻重二「長尾雨山と儒葬―朱熹『家礼』の実践―」（『書論』第四十五号、二〇一九年）を参照されたい。

(36) 筆者が調査、撮影したのは二〇二二年二月十四日である。

(37) この碑銘は白嵩顕成『くろ谷金戒光明寺に眠る人びと』（浄土宗大本山　くろ谷金戒光明寺、二〇一三年）三三九頁以下に翻刻がある。

(38) この碑陰文は『京都名家墳墓録』にも翻刻されているが、いま文字や句読点を訂正して載せておいた。

(39) 常盤神社・水戸史学会編『水戸義公伝記逸話集』（吉川弘文館、一九七八年）九五頁。

(40) 吾妻重二「水戸徳川家と儒教儀禮――葬禮をめぐって」（『東洋の思想と宗教』第二十五号、早稲田大学、二〇〇八年）、「水戸藩の儒教喪祭儀礼文献について」（『関西大学東西学術研究所紀要』第四十八輯、二〇一五年）。

(41) 水戸市史編さん委員会『水戸市史』中巻㈠（水戸市役所、一九六八年）八七三頁。

(42) 常盤・酒門墓地については北脇義友「水戸藩主徳川光圀による儒葬墓とその影響」（『石造文化財』第十二号、二〇二〇年）の調査がある。

(43) 筆者が調査、撮影したのは二〇一九年十二月一日である。

(44) 『礼記』玉藻篇に「居士錦帯」の鄭玄注に「居士、道藝処士也」という。のち資産家や在家信者を意味するサンスクリットのグリハ・パティ grha-pati の漢訳語として使われるようになった。

(45) 五弓雪窓『事実文編』第二冊（関西大学出版・広報部、一九七九年）三一一頁。

(46) 古川澄『史林墓表』（水戸市教育会、一九一四年）二三頁。なお、水戸藩の人々の墓碑銘については木戸之都子「水戸藩士の墓碑銘索引」（『茨城大学人文学部紀要・人文コミュニケーション学科論集』第七号、二〇〇九年）が、網羅的ではないが相当数を集めていて有益である。

(47) 本稿（一）、二〇頁参照。

(48) 五弓雪窓『事実文編』第三冊（関西大学出版・広報部、一九八〇年）五五六頁。

(49) 注（46）古川澄『史林墓表』五三頁。

(50) 「量介青山君墓誌」は名越時正編『會澤正志齋文稿』（国書刊行会、二〇〇二年）および亀山聿三編『近代先哲碑文集』第十集「正志會澤先生碑文集」（夢硯堂、一九六七年）所収。

(51) 『斯文六十年史』（財団法人斯文会、一九二九年）五五―五六頁。
(52) 筆者が調査、撮影したのは、常盤共同墓地と同じく二〇一九年十二月一日である。
(53) 『水戸の先人たち』（水戸市教育委員会、二〇一〇年）の「望月恒隆」参照。
(54) 立原翠軒『此君堂文集』（写本、茨城県立図書館蔵）。
(55) 「故彌八打越君墓碑銘」に「先生没、成公命君賜父全禄二百石。初稱介七、至此更稱彌八、蓋襲父稱也」という。ここにいう「先生」は樸斎であり、弥八は父樸斎の通称である弥八の名を継いだことになる。なお「成公」とは第四代藩主徳川宗堯である。
(56) 注（46）古川澄『史林墓表』二四頁に収録される。
(57) 藤田北郭については秋山高志「藤田北郭の書」（秋山『水戸の文人　近世日本の学府』所収、ぺりかん社、二〇〇九年）が有益である。
(58) この墓碑文は一斎の文集『愛日楼文詩』四冊（刊本）、『愛日楼全集』五十六巻（写本、ぺりかん社影印、近世儒家文集集成第十六巻、一九九九年）のいずれにも載っておらず、東京都立中央図書館・河田文庫蔵『愛日楼稿本』十冊（写本）の第七冊にのみ「水藩故執政晴軒藤田君墓銘」として載っている。ぺりかん社影印『愛日楼全集』荻生茂博解説の四〇頁参照。それによれば、この文には「槻代」と記されているので、佐藤立軒の代作である。なお、当墓碑文の撮影については茨城大学教授の井澤耕一氏の協力を得た。
(59) 吾妻重二「佐藤一斎『哀敬編』について――日本陽明学者の新たな儒教葬祭書」（原田正俊編『アジア遊学』二四五　アジアの死と鎮魂・追善、二〇二〇年）参照。
(60) 高松藩主の墓については、香川県立ミュージアム編『高松藩主松平家墓所調査報告書』（香川県立ミュージアム、二〇一五年）による。写真も同書による。墓碑銘の翻刻は同書に掲載されている。なお宮武浩二氏の教示を得たことに感謝申し上げたい。
(61) 『常陸太田市内遺跡調査報告書　水戸徳川家墓所』（常陸太田市教育委員会、二〇〇七年）二八頁。
(62) 光圀らの墓が螭首亀趺になっているのは明代の礼制と関係があり、光圀の父頼房は正三位、光圀以下の水戸藩主は従三位であるため、「五品以上」は螭首亀趺を用いるのを許すとする『大明令』や『明集礼』に従ったのであった。この規定からすれば四位である頼常と頼恕も螭首亀趺形式をとってよいはずであるが、そうしなかったのは水戸藩主との格の違いを考慮したためかと思われる。水戸藩主の墓制の礼的根拠に関しては、注（40）吾妻重二「水戸徳川家と儒教儀禮――葬禮をめぐって」参照。

図１　中村惕斎墓（右）と鵜飼石斎墓（左）（円光寺）　左手は鵜飼石斎誌石

図３　改葬前の中村惕斎墓（『日本博物学史』）

図２　中村惕斎墓

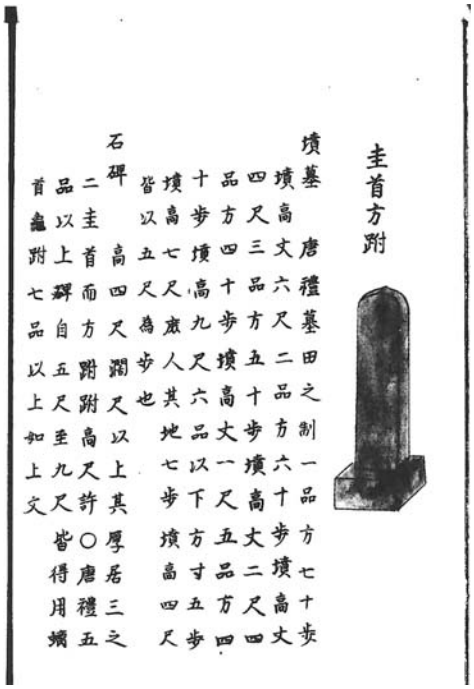

図４　圭首方趺の図（『慎終疏節』巻三）

図５　鵜飼石斎誌石

図６　藤井懶斎墓所（西寿寺）　右が懶斎墓、左が象水墓、その左が革軒墓

図８　操軒墓と妻中村氏墓

図７　米川操軒墓地（金戒光明寺）　左手前が操軒墓　その右手後ろが妻中村氏墓　手前中央が東庵墓

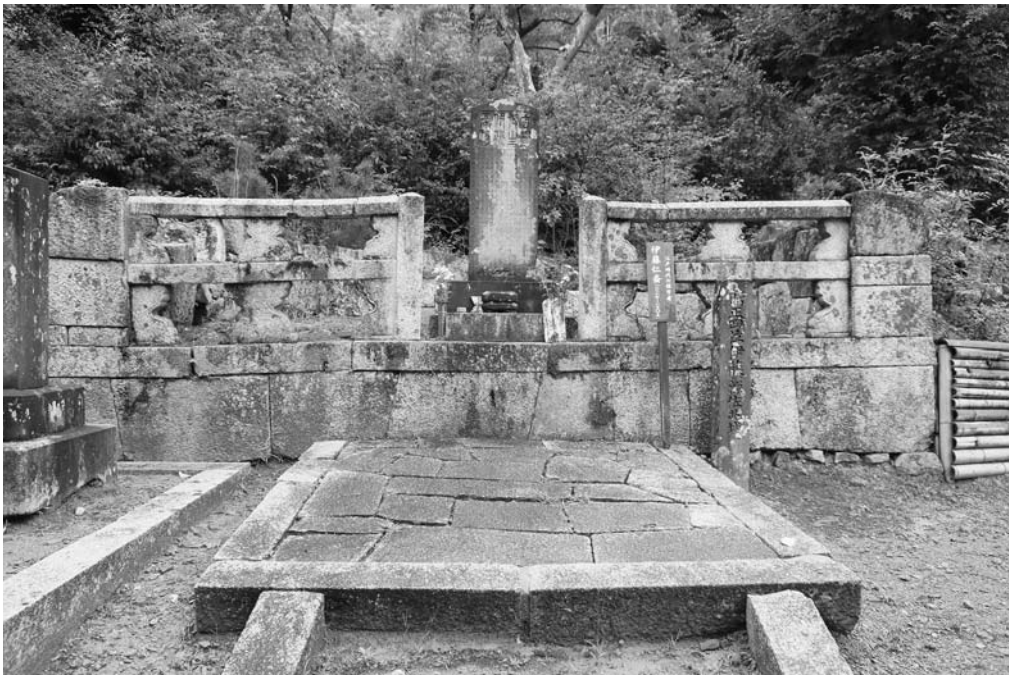

図９　伊藤仁斎墓（二尊院）

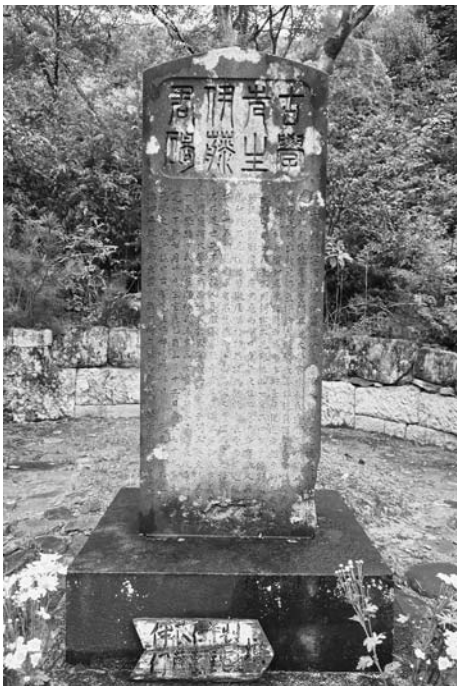

図 10　伊藤仁斎墓碑

「伊藤世俊墓」（東涯長男）

「壽玄孫人里村氏之墓」了室、仁斎母）

「温正孫人墓銘」（加藤氏、東涯妻）

「伊藤了室府君之墓」（仁斎父）

「季常伊藤氏墓」（東涯長女）

「惠慈孫人墓銘」（瀬崎氏、仁斎後妻）

「謙節先生伊藤君碣」（介亭、仁斎三男）

「分家伊藤家之墓」

「福山伊藤氏之墓」

「清貞孫人墓」

「順貞大同氏墓」（東所後妻）

「順室新庄氏墓」（東所後妻）

「修成先生碣銘」（東所、東涯三男）

「伊藤弘茂墓」（東所次男）

「靜懿井口氏之墓」（東所妻）

「伊藤東皐墓」（東所四男）

「伊藤寛理墓」（東峯長男）

「蘭溪君之墓」（東峯六男）

「阿季伊藤氏墓」

「節婦伊藤氏碣／妹阿留祢」

「武田省察墓」

「紹述先生碣銘」（東涯）

「伊藤蹄雲墓」（輪斎長男）

「順淑孫人之墓」（輪斎妻）

「輪斎先生碣」（東峯三男）

「順常福井氏墓」（東峯妻）

「靖共先生碣」（東峯、東所七男）

「恭敬先生碣」（東里、東所長男）

「古学先生伊藤君碣」（仁斎）

「伊藤氏世代之墓」

「伊藤琢瀰墓」（輪斎養嗣）

「貞淑孫人墓銘」（緒方氏、仁斎妻、東涯母）

「伊藤氏女順靜墓」（仁斎長女）

「伊藤弘富君之墓」（竹里次男）

「温恭孫人青木氏墓」（弘富妻）

図11　伊藤家塋域見取り図
「　」内は墓碑題字

図 12　伊藤家塋域　手前が東涯墓、右奥が仁斎墓

図 14　伊藤東涯墓（背面）

図 13　伊藤東涯墓碑

図 16　北村篤所墓（金戒光明寺）

図 15　仁斎母（寿玄孺人）墓

図 17　安積澹泊墓（常盤共有墓地）

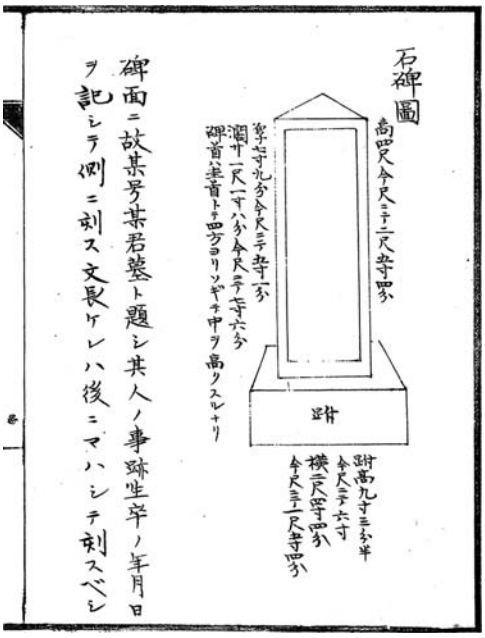

図 18　石碑図（『喪祭儀略』）

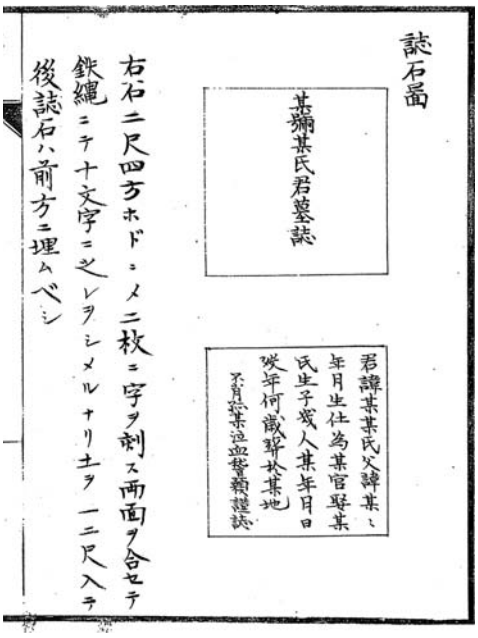

図 20　誌石図（『喪祭儀略』）

図 19　常盤共有墓地に林立する尖頭型の『家礼』式墓碑

図 21　高橋坦室墓所　左奥から右へ二基目が坦室墓

図 22　青山拙斎墓所　右から二基目が拙斎（延于）墓　三基目が佩弦斎（延光）墓

図 23　望月恒隆墓（酒門共有墓地）

図 24　河合菊泉墓所　左端が菊泉墓　後方は藤田晴軒墓所

図 25　打越弥八墓所　右が弥八墓　左が妻太田氏墓

図 26　藤田晴軒墓所　奥が晴軒墓　その前方に尖頭型の『家礼』式墓碑が並ぶ

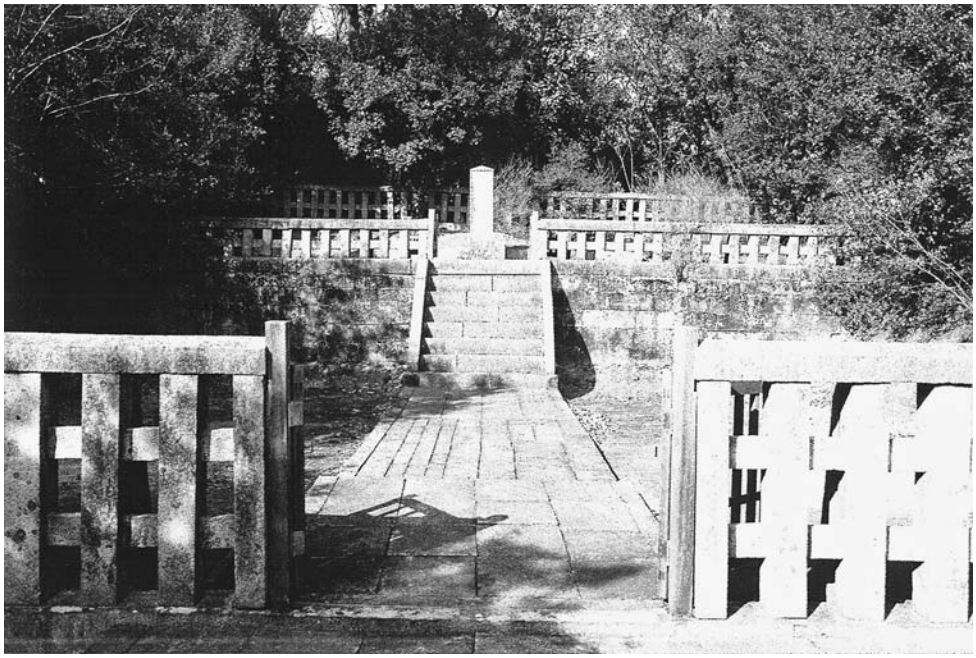

図 27　第二代高松藩主松平頼常墓（霊芝寺日内山）

図 28　第九代高松藩主松平頼恕墓

Jia-li Style Confucian Tombs in Japan:
A Study from the Perspective of Cultural Interaction in East Asia, Part 3

AZUMA Juji

Numerous Confucian tombs were constructed during Edo period Japan, based on Zhuxi's *Jia-li* of Nansong China. However, scant research exists on this subject. This paper will continue the exploration elucidated in a previous article, utilizing field surveys and a review of the literature to reveal the grave systems and their characteristics. In so doing, the paper will illuminate the ideological investigations of Confucianism in Japan.

キーワード：朱子学（Zhuxi's Thought）、墓碑（tombstone）、中村惕斎（NAKAMURA, Tekisai）、藤井懶斎（FUJII, Ransai）伊藤仁斎（ITO, Jinsai）、安積澹泊（ASAKA, Tanpaku）、水戸藩（Mito clan）、高松藩（Takamatsu clan）